２０２４年６月１６日聖霊降臨後第４主日説教

エゼキエル書３１章１－６、１０―１４節
コリントの信徒への手紙二５章１－１０節
マルコによる福音書４章２６―３４節

先週から急に３０度を超える日々となりました。皆さまどうぞ体調には、くれぐれもお気を付けください。

さて、本日の旧約日課は、エゼキエル書の３１章です。この部分は、２５章から始まる、小さい国から大きな国まで、諸外国への主なる神様の裁きについて、預言者エゼキエルが語っている箇所です。

「**第十一年の第三の月の一日に、主の言葉が私に臨んだ**」（エゼ 31：1）と始まりますが、この「第十一年」は、ユダヤのヨヤキン（エホヤキン）王（王国の最後から二番目の王）が、バビロニアに連れ去れてから数えた年数です。エゼキエルは、自分の王国の繁栄からではなく、その滅亡に関する事柄から時を見ています。そして、もうすぐ自分の王国は滅ぶが、その滅びに際して、諸外国への裁きを語っているのです。

預言者エゼキエルは続けます。「**人の子よ、エジプトの王ファラオとその軍勢に向かって言いなさい。お前の偉大さは誰と比べられよう。見よ、あなたは糸杉、レバノンの杉だ**」（エゼ 31：2）。ここからエジプトの偉大さを「レバノン杉」に例えてほめたたえる個所が続きます。聖書日課では省略されていますが、３１章９節には、「**私が多くの枝で美しくしたので、神の園にあるエデンの木々は皆この木を羨んだ**」とまで表現しています。レバノン杉の姿に例えられるエジプトの繁栄は、エデンの木々が羨むほどであったということです。ただし、聖書協会共同訳の小見出しに、「レバノン杉の運命」とある通り、また、「私が多くの枝を美しくしたので」とある通り、エゼキエルの目的は、エジプトを単にたたえることではありません。１０節以降に「**それゆえ、主なる神はこう言われる。この木は背が高くなり、梢を雲の中に伸ばし、高さゆえに心が高慢になったので、私は彼を諸国民の有力者の手に渡した。その者は彼をその悪に応じて厳しく扱う。私は彼を追放した**」（エゼ 31：10-11）、高慢になったエジプトへの裁きです。この箇所は、以前の新共同訳では、１０節と１１節は区切って訳してありましたが、新しい聖書協会共同訳では続けて訳し、また１１節を現在形で訳していました。それゆえ少しニュアンスが変わりましたが、おごり高ぶったエジプトへの批判が書かれている点は変わりません。批判自体の内容は、３０章１０節以降にある、バビロニアとエジプトとの事柄と思われますが、ここでの要点は、世界情勢を語ることではありません。

イスラエルは、エジプト、バビロニアに比べれば、小国です。そして、その小国はさらに南北に分裂し、北イスラエル王国はすでに滅び、南のユダ王国も滅びようとしています。しかし、そのようなイスラエルに比べて、はるかに強大な国、エジプトであっても、自らの力と繁栄を過信し、また思いあがれば、かならず滅びる。本日の個所の最後１４節には、「**それは、水辺の**

すべての木が高くならず、その梢を雲の中に伸ばせず、また水に潤う木々が自らを頼んで高ぶることがないためである。これらすべては死に渡され、地の底、人の子らの間、穴に落ちていく者のところに行くからだ」とあります。どんなに強大な国であっても、人間の力で立てられた国は、いずれ滅びると語っているのです。

エゼキエルは、自国の民に向けて語っているのですが、すべての民が主なる神様に立ち返ることを呼びかけています。そして、そこから現在を考え、未来を見ることを求めています。だからこそ、「レバノン杉の運命」として、エジプトについても語ることができるのですが、そこには、歴史に対する大切な視点があります。つまり、歴史を学ぶことは大切であるが、その学びは、人間が自分の都合のよいように、過去の出来事を解釈し意味付け、現在と未来を見てはならないという警告があるのです。人間の世界で起こる対立の原因の一つには、そのような歴史の学びに基づく事柄があるということです。歴史を全く学ばないことも問題ですが、あまりに一つの価値観で固められた過去の認識は、それを否定する価値観と対立を起こします。

もちろん、『聖書』が示す主なる神様の視点で過去、現在、そして未来を見る、それも一つの価値観ではないかという批判もあります。しかし、その価値観に立つとき、人間は、自分が人間にすぎないことを自覚させられるのです。そして、自らが人間であることを自覚するからこそ、他者に対して、破壊的なことができなくなるはずなのです。

『聖書（旧約）』に記された小国であるイスラエルの歴史においても、また教会の二千年の歴史においても、主なる神様の前で謙虚な人の平和なお話ばかりではありません。むしろ、人間によって（時には神の名によって）悲しい破壊的な出来事が繰り返されてきました。『聖書』が示す主なる神様を信じるからこそ、様々な人が、民族や文化や、違いの枠を超えて、平和に暮らす、そのような状況は、歴史上も今も誕生していません。しかし、人間に過ぎないわたしたちは、主なる神様を信じること以外に、まことの平和につながる道を見出すことはできないのです。

本日の使徒書に、「**私たちの地上の住まいである幕屋は壊れても、神から与えられる建物があることを、私たちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住まいです**」（２コリ５：1）とある通り、わたしたちの希望は、地上ではない天にある住まいです。すなわち永遠の命の約束です。わたしたちは死が終わりではない本当の希望を持っています。だから、そこからまことの平和が生まれます。ただし、この永遠のいのちを希望は、教会のみが語る希望ではありません。この世界には、様々な形で永遠のいのちを信じる人々がいます。そして、むしろ破壊的になる人々もいます。しかし、だからこそ、わたしたちは、主なる神様に立ち返り、永遠のいのちの希望を信じるからこそ、平和への道をいつも探り作り上げていきたいと思います。その希望に基づいた歩みを、教会の中で具体化していきたいと思います。